

親鸞聖人 750回大遠忌

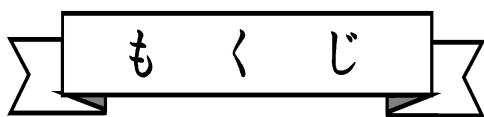
西法寺

記念事業完成記念誌



淨土真宗本願寺派

塩出山西法寺



もくじ

第20代 住職ご挨拶	1
西法寺の由来	2
碑文の内容を現在文に訳して	3
内陣修復について	5
ご本尊（阿弥陀如来立像）・親鸞聖人坐像について	6
漆作業工程について	7
彩色修復作業について	9
西法寺の蟇股彫刻について	10
記念華把	14
鐘楼・釣鐘について	15
写真でつづる慶讃法要	16
お稚児さんのお勤め	16
慶讃法要	19
音楽法要	19
記念法話と記念コンサート	19
ご協力を頂いた方々	19
記念事業実行委員	20
編集後記	21

【表紙お写真は、西法寺本堂です。】

ご挨拶



塩出山 西法寺

第20代住職 安藤和範

平成23年5月28日、五月雨の中「西法寺親鸞聖人750回大遠忌・記念事業完成慶讃法要」をご門徒の皆様はじめ、ご縁のある寺院・僧侶の皆様、仏具・工事関係の方々等、本当に多くの皆様のご支援ご協力のもと、お勤めさせて頂くことができましたことは、住職として誠に有り難いことありました。

西法寺におきましては、平成22年4月より、皆様方の尊いご懇念を頂戴し「親鸞聖人750回大遠忌 西法寺記念事業」として、本堂内陣と鐘楼の修復工事を進めさせて頂きました。

お陰様をもちまして、修復工事は順調に進み、平成22年6月末には鐘楼の屋根も美しく甦り、凜々しい姿を現して下さいました。

お内陣は平成22年4月20日より、ご本尊である阿弥陀如来立像やお宮殿（くうでん）、お厨子や道具類などの運び出しが始まり、約1年1ヶ月の修復工事の後、平成23年5月17日にご本尊が仏師様の手によりお宮殿にご安置され修復工事が完成し、お陰さまで、平成23年5月28日（土曜日）に上記の通り「親鸞聖人750回大遠忌・西法寺記念事業完成慶讃法要」を厳修させて頂くことができました。

一連の事業が無事に完成し慶讃法要をお勤めさせて頂くことができましたことは、総代さまはじめ記念事業実行委員の方々やご門徒、関係各位の皆様のご理解ご協力を賜ってのことあります。そして、聖徳太子の創建以来より、親鸞聖人・蓮如上人をはじめとして数限りない人と人の繋がりとご教導があってこそ今日の西法寺が存在し、私自身が今ここにあることの有り難さにも改めて想いを深めることでございます。

誠に広大な量り知ることのできない尊い御恩を賜っておりますことに深く御礼申し上げご挨拶とさせていただきます。

平成24年9月好日

〒582-0097 滋賀県守山市中園合掌

この記念誌は「西法寺の由来」「記念事業修復工事」「親鸞聖人750回大遠忌・記念事業完成慶祝法要」の紹介をさせて頂くものです。

西法寺の由来

[私が住職になり、よく聞かれるのは「ここのお堂は何時建ったのですか？」という質問です。そこで、西法寺の由来について少し紹介させて頂きます。]

西法寺の西門の西側に石碑が建っています（写真）。その石碑に西法寺の歴史が記されてありますが、風化して現在では読みません。ただ、随分以前にその碑文を書き写したものが残っていますので、それをもとに西法寺の歴史を少し紹介させて頂きます。

先ず石碑の銘文ですが、

表 面 聖徳太子御建立 蓮如上人旧蹟

右側面 塩出山 西法寺

左側面 天保5甲午仲冬也（1834年）

[尚、西門の建立は元文2（1737）年です]

裏 面 碑文は第13代住職釈善念（1787～18

41）によるもので漢文です。現在では風化が激しく判読不可能ですが、明治か大正時代に第17代住職釈善調が書き写したものが残っております。



石碑表面

それをもとにして前住職（第19代正香）が読み下したものがありますので、碑文の内容を現在文にしてみました。



石碑右側面



石碑左側面



石碑裏面

【碑文の内容を現在文に訳して】

《聖徳太子が仏教に反対する物部守屋（もののべもりや）を倒し、日本に仏教信仰が根づいていく基盤を作りました。その太子が国分の枯栖山の麓を通っていた時に光を放ったものがあり近づいてみると、それは「塩出の神」がありました。その神が太子に「ここに寺を建てなさい。後世に必ず崇えます」と告げられました。

それによって、ここに一寺を建立し塩出山放光寺と名づけました。

宝亀3（772）年に火災により堂塔、門、仏像、経巻などことごとく焼失し、わずかに礎石を残すだけとなりました。その後小さなお堂を建てて、法灯を守り続け約900年、寺は次第に廃れていきました。

文明8年、本願寺第8代蓮如上人がこの地を訪ねられ、寺の衰退ぶりを見てご心配されました。その後上人は7日間逗留され、ねんごろに「浄土真宗の教え」を説かれ、それ以来浄土真宗の寺院となりました。

放光寺の場所は国分の郷からやや遠く、人々が朝夕のお参りに不便なことから場所を現在の地に移されました（1660年ごろ）。

そして、本願寺第12代宗主准如上人より「西法寺」の寺号（1607年）を賜り、現在に至っています。

寺主（西法寺第13代住職）善念これを撰す》

西法寺の由来については、前住職（第19代正香）の記録によりますとこの碑文以外にも「由緒書き」が何種類か残っています。

前住職が平成8年に出しました「西法寺沿革」にはそれらの由緒書きをまとめて文章にしていますので要約して紹介させて頂きます。

《今から約1400年前、聖徳太子（574～622年）が仏法を広めるため「塩出山　淨生院　放光寺」というお寺を枯栖山（今の芝山らしい）の麓、杜本（とのもと）神社の近くに建てられました。初代の住職は「実言」という方でした。

放光寺は、宝亀3年（772年）火災で、堂塔・門など悉く焼失して僅かに礎石を残すだけとなつたために、小さなお堂を建てて法灯を護り続け、創建以来900年が経ち、第53代住職「実弘」の時代となりました。

当時の国分代官「安藤善正」は実弘の弟であり、兄弟で本願寺第8代



の蓮如上人を慕い、そのみ教えを信奉して浄土真宗に帰依しました。それが、文明8年（1476年）のことです。

そこで、西法寺では「善正」を浄土真宗としての開基住職としています。その後「蓮如上人」は当寺にお立ち寄りになり7日間逗留され、浄土真宗のみ教えを懇ろにお説きになられました。

「放光寺」が「西法寺」という名前（寺号といいます）に変わりましたのは、慶長12（1607）年10月に本願寺第12代宗主准如上人より「西法寺」の寺号を賜り公称するようになりました。

当時の「西法寺」は芝山の東側山麓付近にあったと思われますが、国分の中心からは少し離れていて人々の参詣には不便でしたので、第8代住職「善空」の時に現在の地（国分本町5丁目）に移転し、本堂は寛文6（1666）年から貞享2（1685）年の約20年の歳月をかけて建立されました。その後、100年以上の歳月をかけ、鐘楼・東西の門・宮殿・書院・内陣等が整備されていき、現在のような形となって残されています。》

このような歴史の上に、今の自分があることを大切にしていきたいと思います。

内陣修復について

前述のように、西法寺の本堂は寛文6（1666）年から貞享2（1685）年の約20年をかけて建てられました。内陣は、今からおよそ220年前（1779～1792年）に約3年の歳月をかけて今のような形に造り上げられたようです。

このたびの内陣修復は、前住職の念願でもありました。

ご本尊（阿弥陀如来立像）、親鸞聖人坐像・宮殿（くうでん＝ご本尊をご安置してある屋形）、厨子（ずし＝親鸞聖人・蓮如上人のご安置してある屋形）の修復、漆の塗り替え、金箔の置き直し、彩色の修復により220年前の姿に甦えったのではないかと想いを巡らせる事でございます。

彩色の作業で、桟形の絵模様・龍・鳳凰・唐獅子・牡丹などや多くの絵模様が復元され、本当に手の込んだ細かい作業をされていたことが改めてわかりました。今回の修復でも漆塗りだけで7ヶ月間以上の月日を要し、彩色も3～5名の絵師



さんが殆ど2ヶ月間休む間も惜しんで作業して下さり、以前の趣を壊さないように復元して下さいました。また、雨漏りのため柱の内部が腐っている所が2カ所ありましたが、柱の一部を取り換えて、以前と同様の絵を新しく描き直して下さいました。

この度の修復では、ご本尊・親鸞聖人坐像・お宮殿・お厨子・前卓なども修復させていただきましたので写真を中心に紹介させて頂きます。

ご本尊（阿弥陀如来立像）・親鸞聖人坐像について

浄土真宗のご本尊は阿弥陀如来です。ご本尊とは、その宗派の中心となる仏様のことを言い、浄土真宗は阿弥陀如来のはたらきで私たち一人ひとりが救われていく教えですから、本堂でもご家庭の仏壇でも阿弥陀如来を中心にご安置されています。

西法寺のご本尊の阿弥陀如来は、その由来がよくわかりません。今回修復して下さった仏師さんによりますと、恐らく室町時代の製作であろうということです。そして、この阿弥陀如来像は「春日の御作なり」と伝えられていますが、「春日」が人名なのか地名なのか定かではありません。ただ、今回の修復で、仏像内の心棒に「大仏師小川常風」の名前が書かれてありました。仏師さんに調べていただきましたが「小川常風」なる人物のことは判らなかったそうです。

浄土真宗の一般寺院では親鸞聖人のご絵像をご安置されることが多いのですが、西法寺では親鸞聖人坐像（木像）をご安置しています。これは浄土真宗のお寺としては珍しいことです。

この木像についても由緒がよく判りませんが、「親鸞聖人六十歳御帰洛御満悦」の像という記録もあります。昭和36年の修復の時からご安置させて頂いております。

このように、どちらのお像も何時、どなたが製作されたか定かなことは判りませんが、大事なことは、どちらのお像も大切にお莊嚴させて頂くことだと思います。



漆作業の行程について



今回、伝統工芸士の八尾漆工芸 稲田功氏が修復作業をして下さいました。
(この工程は稻田さんから示していただいたものです)。

1. 旧塗装面の剥離・研磨

傷んだ古い漆の面を剥がしたり研

磨をして木地をむき出しにします。

2. 木地直し

亀裂の入った箇所や大きく欠けた箇所に木材を接着し、大まかな形を整えます。

3. 刻苧埋め

木地の継ぎ目や、傷んだ部分を掘り、生漆に櫻の粉と糊を混ぜ合わせた刻苧（こくそ）を埋めます。

生漆（きうるし）とは漆の木から採ったままの、加工をしていない漆のことです。



4. 木地固め

経年変化や虫食いなどで傷んだ木地に、生漆を染み込ませ、乾燥させることによって補強を行います。

生漆は粘り気がありそのままでは染み込みにくいため、揮発性の油を混ぜ染み込みやすくします。

5. 布はり

漆と糊を混ぜ合わせたものを使って、麻布を木地に貼っていきます。

まず、木地の継ぎ目や割れ目の周辺に貼って乾燥させます。その後、木地全体にもう一度麻布を貼ります。布を貼ることで木地の割れ目や瘦せを防ぎます。

6. 堅地付け

地の粉という珪藻土を高温で焼いたものと、生漆、糊を混ぜた型地をヘラでつけていきます。乾燥させると大変丈夫で硬くなります。

7. 鑄地付け

砥の粉という赤土と生漆を混ぜ合わせた鑄地を、ヘラでつけていきます。4～5回ヘラ付けを繰り返し、形を整えていきます。

8. 中塗り

下地を研磨し、完全に形が整ったら中塗漆を塗ります。中塗漆には黒漆を使用します。

黒漆は、生漆を精製し墨で黒い色を着けた漆です。漆を塗る際は人毛でできた刷毛を使います。

9. 上塗り

中塗りを2回繰り返し、乾燥・研磨をした後、上塗りを行います。塗っただけで完成する技法を立塗りと呼びます。立塗りには、光沢の強い立塗用黒漆を使います。呂色箇所には呂色漆、金箔を押す箇所には箔下漆と、用途によって漆を使い分けられます。

10. 呂色

漆を上塗りした後、研磨しホコリ跡や刷毛目を無くし、強い光沢のある仕上げにすることを呂色と言います。上塗りした漆を十分に乾燥させた後、木炭や砥石で研磨する。表面を滑らかにした上に生漆を刷り込み、さらに乾燥させてから鹿の角粉と種油を使い、手のひらで磨きあげます。

生漆を刷り込み磨き上げる作業は3回繰り返します。

11. 金箔押し

呂色工程と同じく、上塗りした漆を十分乾燥させてから木炭や砥石で研磨します。ホコリ跡や刷毛目を取り除き、滑らかになった表面に生漆を3回刷り込みます。完全に乾燥させてから箔押漆という高品質の生漆を接着剤として使用し、金箔を貼り付けていきます。



金箔は竹で作ったピンセット状の箸を使って貼り付けていきます。

彩色修復作業について

彩色の修復には、「京彩色中嶋」の絵師さんが補色をして下さいました。本堂内陣の彩色は相当汚れがひどく、暗い場所でもあったのであまり皆さんのに触れることがなく、よくお参りをなさっている方でもその印象が薄かったようです。

今回の修復は、以前の雰囲気を残した補色作業にしていただきました。お陰で金箔の剥落していた部分の修復で鳳凰や唐獅子が甦り、蟇股（かえるまた）の彫刻では、人の表情が読み取れるようになりました。

以下、柱に描かれた絵や彩色の模様を写真で紹介させて頂きます。



西法寺の蟇股彫刻について

「蛙股（かえるまた）」（三省堂「大辞林」参考）

蛙股とはカエルが足を広げた形をしていますのでこの名が付けられています。建築用語としては「蟇股」（かえるまた）と書くのが正しいようです。（以下は蟇股と表記します）

社寺建築などで、頭貫（かしらぬき）または梁（はり）の上、桁との間に置かれる山形の部材で、本来は上部構造の重みを支えるものでした。後には単に装飾として、さまざまな彫刻をして破風などに付けられました。厚い板でできた板蟇股と中を透かした本蟇股とがあります。

西法寺の蟇股は欄間の上に7ヶ所ありますが、上の分類ですと板蟇股ということになります。

西法寺にあります蟇股の中の彫刻の題材は、中国古代の代表的な24人の親孝行の人の物語です。どういうわけで、この「二十四孝」の教えが取り入れられたのかわかりませんが、西法寺の場合は本願寺御影堂にある蟇股を手本にしたのではないかと思います。寺院建築の当時の流行の一つであったとも考えられます。（正しくはよくわかりません）

さて、『二十四孝』は、中国で古くから子供たちに聞かせるため語り継がれてきた物語だそうです。そのお話を元（げん）の時代の郭居敬（かくきょけい）という人が24人の孝行者の話としてまとめたものと言われています。

日本には、何時入ってきたかは定かではありませんが、江戸時代には寺子屋で教材として使われていたそうです。

浄土真宗のお寺は、門徒さんが家族でお参りする場所であり、又、学校の役割もしていたと考えられます。そういう意味からしますと、この「二十四孝」の彫刻が装飾（莊嚴）ということだけでなく、お寺詣りや本堂で習い事をする中で、親のことを思う心を養う教材となっていたのかも知れません。

では、西法寺にある7つの彫刻について、その物語を少し紹介させて頂きたいと思います。本堂内陣に向かって左からご紹介します。

写真① 楊香（ようこう）のはなし

楊香は父と一緒に山へ行った時、虎が躍り出て、今にも2人を食べようと襲いかかってきました。楊香は父が虎に食べられないように前に立ちはだかり、すさまじい勢いで虎と戦ったので虎は逃げて行つたということです。



写真①

写真② 舜（しゅん）のはなし

舜は小さい時に母を亡くし、さびしい毎日を送っていましたが、父の目が不自由だったので、舜はその父を助けるためによく働きました。

やがて新しい母が嫁いできて、まもなく弟が生まれました。

母は舜にばかり畠仕事を押し付けて何かとつらく当たりました。それでも舜は不自由な父のことを思い父母によく尽くしました。

ある日、舜が畠仕事を精を出していますと、象や鳥や色々な動物が、集まってきて舜の仕事を手伝ってくれたのです。

時の皇帝 堯（ぎょう）は舜の親孝行と働きぶりを見て感心し、舜を自分の娘の婿として迎え入れ、やがて皇帝の座を譲りました。

皇帝の座を譲り受けた舜皇帝は、その後、立派に国を治めたということです。



写真②

写真③ 郭巨（かくきょ）のはなし

郭巨の家は貧しかつたが、母と妻を養っていました。妻に子供が生まれ、郭巨の母は孫を可愛がり、自分の少ない食事を分け与えたりしていました。

ある時、郭巨は「我が家は貧しく、母の食事さえも足りないので孫に分けていてはとても無理だ。夫婦であれば子どもはまた授かるだろうが、母親は二度と授からない。ここはこの子を埋めて母を養おう」と妻に言いました。。

妻は悲観に暮れましたが、夫の命に従う他なく、3歳の子を連れて山へ埋めに行きました。郭巨が涙を流しながら地面を掘っていますと、黄金の釜が出てきて、「孝行な郭巨に天からこれを与える。他人は盗ってはいけない。」と書いてありました。郭巨と妻は大喜びで、子供と一緒に家に帰り、更に母に孝行を尽くしたということです。



写真③

写真④ 老菜子（ろうらいし）のはなし

老菜子は、年老いた両親を喜ばせるために、70歳になっても派手な着物を着て、子どものような振る舞いをしました。これは、老菜子が70歳の年寄りになつて、若く美しくないと見せると両親が悲しむのを避けるためがありました。



写真④

写真⑤ 曾参（そうさん）のはなし

孔子の弟子の曾参は、ある時山へ薪を取りに行きました。母が留守番をしている時に曾参の親友が訪ねてきました。

ところが母親はどうもてなしていいかわからず、おろおろし曾参が早く帰ってほしいと願って自分の指を噛んだりしていました。

山で働いていた曾参は、急に胸騒ぎがあるので急いで家に帰ってみますと、母が事のいきさつを話してくれ、曾参は胸騒ぎの原因がわかりました。離れていても、親子の情愛は伝わるものであるというお話です。



写真⑤

写真⑥ 唐夫人（とうふじん）のはなし

唐夫人の姑の長孫夫人は年老いて、食べ物を歯で噛むことができなくなっていました。

これを心配した唐夫人は毎朝早く起きて姑の所に行って、顔や手足を洗ってやったりし、姑が歯が悪く食べ物が噛めないということで、自分の母乳を飲ませたあげたという話です。



写真⑥



写真⑦ 孟宗（もうそう）のはなし

孟宗は、幼い時に父を亡くし、母を養っていました。

病気になった母は、色々な食べ物を欲しがり、ある冬、^{たけのこ} 箕を食べたいと言いました。

冬に箕があるはずがないのですが、それでも孟宗は竹林に行き、一生懸命雪の中を掘っていましたら急に雪が解け、土の中から箕が沢山出てきました。

孟宗は大変喜び箕を探って帰り、熱い汁ものを作って母に

与えてあげますと、たちまち母の病気が治ったというお話です。

このお話が孟宗竹（もうそうちく）の語源になっているようです。



写真⑦

記念品の華葩（けは）



鐘 樓



内陣の彩色



華葩の裏面



墓股彫刻

鐘楼・釣鐘について



鐘楼(釣り鐘堂)は、棟札によりますと元禄13年（1700年）、第10代住職善亮の時に建立されました。

棟札には

元禄十三年辰六月十九日

河州安宿郡国分村 奉建立鐘 樓堂 西法寺 善晃 生年三十歳

施主 新町米屋 市右衛門 大工 藤原氏末門谷利兵衛重次

と記されています。

釣鐘はその銘によりますと天和3年（1683年）に鋳造されたものです。

銘には

天和三年癸亥七月二十五日

西法寺 善空（第8代住職）

河州安宿郡国分村 寄進 爽正頓

冶工 和州葛下郡五位堂住

周防少掾藤原末次 三代目六兵衛

と記されています。

この釣鐘は、第二次世界戦争中に供出されましたが、戦後返つてきました。その名残が鐘にあいている穴です。

写真でつづる慶讃法要

平成23（2011）年5月28日、親鸞聖人750回大遠忌西法寺記念事業完成慶讃法要、並びに、親鸞聖人750回大遠忌法要を、ご門徒の皆様はじめ多くの方々のお蔭を頂きお勤めさせて頂きました。



当日はあいにくの雨となり、午前中に予定しておりました稚児行列は中止となりましたが、マイクロバスなどで約180名のお稚児さんが、ご両親や祖父母の方と一緒に本堂にお集まりいただき、法中の皆さんとお勤めを頂きました。



東条町 1



記念品として作成された華葩（けは）



東条町 2



記念品として作成された華葩（けは）



市 場



中 之 町



昭 和 町



東 町



記念品として作成された華葩（けは）



記念品として作成された華葩（けは）



神明町・田辺



大国町・寿町



旭ヶ丘



柏原・他所



西法寺庭園に咲く花

慶讚法要



本願寺総長より祝辞を石川南組
葛本組長より伝えて頂きました。



法中の諸先生ご入堂



達書のご伝達



田中総代長挨拶



西法寺めぐみ会の皆さんの
音楽法要

記念法話



本願寺布教使 古山款夫先生

ご協力頂いた法中の諸先生



記念コンサート



明覺寺住職 ソプラノ歌手
柱本めぐみ先生

記念事業実行委員

敬称略

次夫	一一一	司三實雄保郎	雄勝郎	博二勇夫
初敏	淺利秀弘哲	繁義	一弘吉	太
田浦	田部浦辻井園本國田田木池山山木山			
武三吉	磯勝大松春畑入山山青益稻稻高内			
委員	(東条町)	(市場)	(中之町)	(昭和町)
			(東町)	(神明町)
			(西町)	(大国・寿町)
				(田辺)
				(旭ヶ丘)
(総代会)				
(敬信講)				
(めぐみ会)				



西法寺住職と実行委員

編集後記

記念法要から早くも一年が過ぎました。
記念冊子の作成・お届けが、大変遅くなりましたこと深くお詫び申し上げます。

本堂内陣はその後、床板に生漆（きうるし＝生の透明状態の漆）を塗つて頂き、内陣としての莊嚴さを更に増しております。機会がありましたら是非ともお参り下さいますようお願い申し上げます。

最後になりましたが、この記念冊子の発行のためにはご協力頂きました皆様方、特に、ご多忙の中時間を割いて編集の全てを引き受けて下さり、ご尽力いたしました西法寺敬信講会長の上田茂男様に厚く御礼申し上げます。

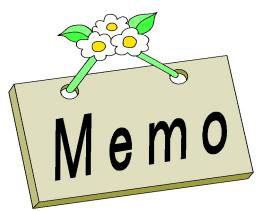
誠に有難うございました。

西法寺第20代住職

安藤和範



発行日 平成24年9月20日
発行所 塩出山西法寺
大阪府柏原市国分本町5-6-19
TEL: 072-977-3882
発行者 安藤和範
印刷所 古賀印刷株式会社





本堂屋根瓦に刻まれた西法寺御紋